

第8章 大谷地の歴史と民俗

佐藤 庄一

1. 白竜湖周辺の原始古代遺跡

白竜湖がある大谷地周辺には、これまで数多くの遺跡が分布することが知られている(第31図)^(注1)。北西から東辺の山麓一帯は、基盤である凝灰岩の露頭が各所にみられ、その風化により形成された洞穴や岩陰が多い。それらは古くから人間の生活の場として利用され、日向洞穴、尼子岩陰群、神立洞穴、一ノ沢洞穴、一ノ沢岩陰、火箱岩洞穴、観音岩洞穴群、ムジナ岩岩陰、鳥取山岩陰、大立洞穴など全国でも屈指の洞穴遺跡群が点在する。

このうち1955年から4次にわたり実施された日向洞穴の洞内外の発掘調査では、報告書が未完であるものの縄文時代草創期の土器群が層位的に検出したとされる。1989年、日向洞穴の西地区で町道改良工事に伴う緊急発掘調査で縄文時代草創期の遺構と遺物がまとまって出土し、遺跡が日向洞穴の西側の平坦地に広がることがわかったことから、日向洞穴遺跡として把握されるようになった。2013年からは、東北芸術工科大学文化研究センターにより長井謙治氏を調査担当者として西地区の学術調査が継続的に実施されている^(注2)。

北町遺跡は南陽市赤湯字新田に所在し、縄文時代前期から後期の遺跡であるが、1996年と2016・2017年の南陽市教育委員会などによる調査で、石匙・局部磨製石斧・石槍・矢柄研磨器などに縄文時代草創期に通じる特徴がみられ、日向洞穴遺跡とほぼ同時期の開地遺跡と想定されている。

また、白竜湖のすぐ西側にある月ノ木B遺跡は、1987年の国道13号南陽バイパス建設工事に伴う山形県教育委員会による調査で、縄文時代早期中葉から前期前葉まで連続する土器群が出土している。礫石器の出土は少なく、石鏃・石篋・搔器など動物に対する生産用具が多いことから、大谷地に飛来する渡り鳥の狩猟に関係した遺跡であった可能性が推測されている^(注1)。

さらに、押出遺跡は高畠町大字深沼字押出に所在する、縄文時代前期中葉の低湿地集落である。1980年から三ヵ年にわたり国道13号南陽バイパス建設工事に伴う山形県教育委員会による調査で、盛土遺構や打ち込み柱、土器や石器・彩漆土器・木製品・クッキー状炭化物などが検出されている^(注3)。白竜湖周辺には同じ縄文時代前期の遺跡として、北町遺跡や稲荷前遺跡、羽口遺跡などがある。

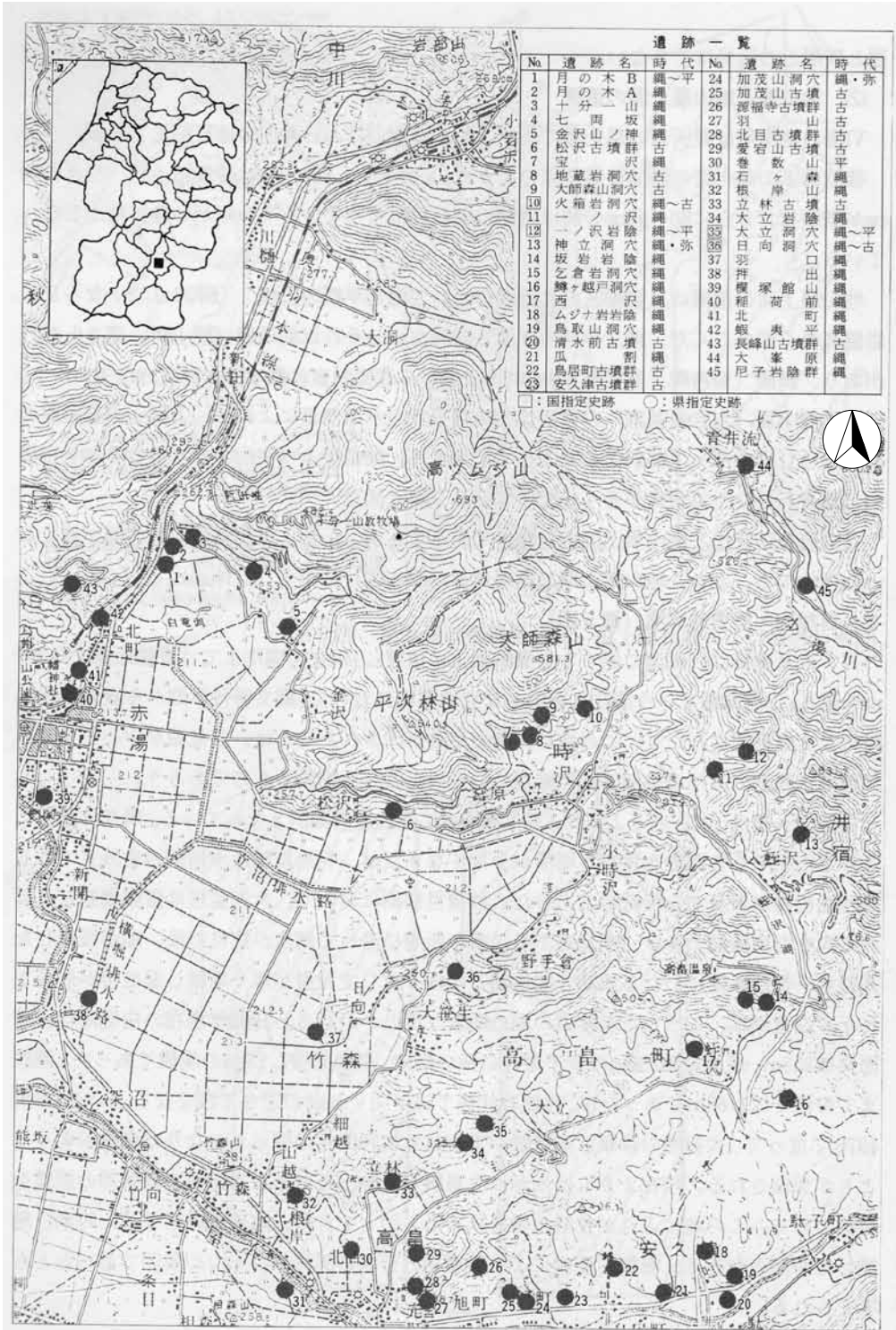
縄文時代中期になると、白竜湖北山麓の十分一山遺跡、金沢山の神遺跡や大谷地南西部の長岡山遺跡などに大きな集落がみられる^(注4)。

弥生時代の遺跡は少なく、高畠町の日向洞穴や神立洞穴、加茂山洞穴などの洞穴遺跡群などが散見するだけであったが、近年宮内扇状地の自然堤防上に沢田遺跡や百刈田遺跡、庚壇遺跡などの住居跡や墓坑をもつ遺跡が認められるようになった。

大谷地の西から南辺にかけては古墳時代以降の遺跡が多く分布する。松沢古墳群は竪穴式石棺をもつ6世紀代の積石塚式古墳であり、高畠町安久津周辺には、清水前古墳群や羽山古墳、安久津古墳群などの横穴式石室をもつ7世紀代の古墳が多数分布する。

第 31 図からはもれるが、南陽市赤湯近辺には全長 96 m の前方後円墳である稲荷森古墳や最近話題になっている南森古墳などの 4 世紀代の古墳、さらに奈良・平安時代の郡衙の可能性をもつ郡山遺跡群などが分布する。

- (注 1) 山形県教育委員会 1989『月ノ木 B 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財報告書第 135 集
- (注 2) 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2015『日向洞窟遺跡の発掘記録第 1 次発掘調査報告書』
- (注 3) (公財) 山形健康埋蔵文化財センター 20017『押出遺跡第 6 次発掘調査報告書』
- (注 4) 南陽市 1987『南陽市史 考古資料編』



74 第 31 図 周辺遺跡分布図

2. 大谷地の開田と推移

1) 大谷地とは

通称『大谷地』と呼ばれた大泥炭地帯は、南陽市赤湯の白竜湖付近から金沢、松沢、棚塚および高畠町大字深沼、大字竹森、大字三条目（飛地）、大字時沢にまたがる約 900ha の区域であり、これらを総称して大谷地と呼んでいた。

大谷地という名称は、前述した高畠町の四大字に実際にあった子字名で、区画整理事業に伴う字界変更等により現在残っているのは、大字三条目大谷地と湯沼温泉の西側に位置する原野地帯の大字竹森字大谷地の一部だけになった。字大谷地は、現況が田であっても、税務署所管の旧土地台帳でみると地目は原野であり、字大谷地は当時一大原野地帯であったことがうかがえる（注¹）。

2) 大谷地の開田

大谷地は、赤湯から高畠の北東部に広がる約 900ha の大きな泥炭湿地帯である。江戸時代から人々はこの地の開田に苦勞し、知恵を出してきた。白竜湖周辺から屋代川右岸北方の湿地帯は、茅やマコモの繁茂する茫々たる荒地であったが、江戸時代初めあたりから次第に開発が行われ、開田されたという記録が残っている。1596 年からの慶長年間に、直江兼次の家臣高畠城代の春日元忠が赤湯村主殿に沼周辺の開発を許し、五年間は年貢等を課さないという文書を与えている。これ以後赤湯、^{とのも}俎柳、深沼、竹森などの村々はそれぞれに開発を進め、元和七年（1621）に時沢が、寛永の頃（1624 ～）には金沢と松沢が一村として成立したとされる。しかし、大水や日照りの時は、水の灌漑と排水の権利を巡って争いが絶えず、江戸表の裁定になることもあった。

江戸時代中頃から明治時代初めの大谷地周辺と白竜湖を描いた絵図などから当時の様子をみると、土地条件のよい山麓や村落付近から水田化し、しだいに条件の悪い大谷地中央部に開墾が進められた様子が見られる。

南陽市指定の文化財として結城豊太郎記念館に保管されている「享保の絵図」（享保二年（1717））からは、南陽市赤湯の街並みの東側がほとんど荒地で、北側周辺が大きな赤湯沼（白竜湖）となっている様子がよくわかる。絵図は 15 幅に分かれており、13 幅目にあたる赤湯村・十分一番所の絵図には、米沢街道が太い赤線で、赤湯村の家並みとその東に広がる沼（白竜湖）と大谷地が主要道路の位置も含めていねいに描かれている。寛政九年（1797）の絵図も残っており、二つを比較すると地名や建物の位置の変化などが読み取れる。

3) 大鎌による谷地田の開発

明治時代になっても大谷地の開発はなかなか進まなかったが、明治 30 年頃から大鎌が使われ始めたことにより、技術的に泥炭層の掘り起こしが格段進む契機になった。刃渡り約 50cm の大鎌は、丈の長い葦の刈り取りや畔づくりのほか開田に使われた。表層面を剥ぎ取り、下の泥炭層を四角の小片に切って起こし、その間に苗を植えこんでいく、といった方法がとられた（注²）。

日照りが続けば田面に水が通らず、固くなり、稲が雑草に負け、草取りもかなわず、収

穫は望めない。このような状態を、水の底抜け、または浮き田という。やがて泥炭層が風化し、大雨が続けば湛水し、稲や田そのものが腐ってしまい、谷地田化する。この繰り返しにより、逆流したり、大きな窪地ができたりして大変であった。従って、灌漑のための堰堀と排水する落とし堀を必要とした。時には堰堀が落とし堀になったという。

(注1) 竹田吉久 2016『大谷地に係わる土地改良事業』清水町の歴史とくらし所収

(注2) 山崎 正 1996『谷地田と大鎌』高島町郷土資料館「企画展・大谷地を拓く」

3. 赤湯七水と北町の七水

白竜湖の北側から西側にかけては、秋葉山から連続する低い山地が起伏し、その南方は鳥上から烏帽子山、薬師山まで延びる。赤湯温泉周辺は、赤湯層上部層の石英安山岩質凝灰岩および凝灰角礫岩が露出し、低い谷部からの湧水が所々に清水を形成している。赤湯七水や北町七水と呼ばれる清水がこれにあたる。

赤湯七水のこと、錦三郎氏が昭和43年に書いた『赤湯町史』に、「赤湯村旧蹟二社六宮七院七水七木七石」として出てくる。この確実な原典は江戸時代末の文化六年(1809)に発行された『米沢地名選』の「米沢地跡考」という本で、その中の温泉郷赤湯の七水の部に「独鈷水、地蔵水、御供水、神洗水、龍神水、薬研水、薬王水」とある。これを手掛かりに赤湯七水の場所を探ってみる^(注1)。

1) ^{どっこのみず}独鈷水 (写真1)

『米沢地跡考』には独鈷水「俗に^{つきのき}槻木清水という、最上街道にあり、槻の伐口より出る水といへり」とあり、最上街道添いの槻木という場所にあることがわかる。

槻木は「月ノ木」とも書き、鳥上坂の登り口の山麓にあたる場所で、古くから豊富な水が湧くことで知られ、大政酒造の酒水としても利用されていた。旧国道が途切れた山麓の西側の木立を分け入ると、石で作られた水槽



写真1 独鈷水付近

に水が溜められており現在も地区民に利用されている。独鈷水という名称は、弘法大師が独鈷の杖で地面を突いたら水が湧いてきたという由来によるものと思われる。

2) ^{じぞうのみず}地蔵水

同じ資料に「化粧坂の北一町ほどきたにあり、地蔵の足跡より出る」とある。化粧坂は北町にあった地名であるが、具体的な場所はわからなかった。

最近、結城豊太郎記念館に保管されている「享保の絵図」を観察したところ、北町の旧八幡神社の南側で、現在の浪重稲荷神社に至る階段の下に清水の印があり、そこに「地蔵清水」と明記されていた。現在も浪重稲荷神社の下の方の街道沿いに、すぐ近くから掘り出された地蔵尊が祀られている。

3) ^{りゅうじんのみず}龍神水(写真2)と^{みけのみず}御供水(写真3)

『米沢地跡考』には龍神水「洞上寺境内にあり、龍神慈覚大師へ進し水と云々」とある。洞上寺は、赤湯清水町にある湯新山東正寺のことである。東正寺の旧道石段入口南側に「大師加持水」の清水があり、ここが龍神水であることがわかる。龍神水は昭和末まで清水町上組の井戸として長く地区民に利用されていたが、水の出が悪くなったため、近年南陽市が名水として井戸跡の保存整備を行った。

同資料に「御供水は深山寺の前にあり、牛馬等不浄の者洗之咎ありとかや」とある。烏帽子山八幡宮が所蔵している江戸時代末天保9年(1803)頃の深山寺境内の建物の配置図の右下に「地蔵加持水」と記された井戸があり、これが御供水であることがわかる。御供水は清水町中組の井戸として最近まで使われていたが解体され、現在は駐車場となっている。



写真2 龍神水(保存整備後)



写真3 御供水

4) ^{みたらしのみず}神洗水(写真4)

「笹原明神の前にあり、明神御手洗水する所なり」とある。表町の(旧)阿部輪店の北奥にあり、最近まで地区民に利用されていた。現在水は出ていないが、近年南陽市が名水「笹原の水」として保存整備を行っている。



写真4 神洗水

5) ^{やげんみず やくおうのみず}薬研水と薬王水(写真5)

『米沢地跡考』には薬研水は「薬師堂の丑寅山中にや、薬研沢というより出る」とある。薬師堂は、赤湯大字二色根の薬師寺の奥の院に建つお堂である。

丑寅とは北東の方角であり、そのまま読むと薬師堂のさらに奥の山の中になるが、この場合は広く二色根地区の北東と考えた方がよさそうである。二色根地区の北東の細い道を鍵形に曲がった奥に、正面を茅のすだれと杭で隠された岩屋があり、中をみるとV字形の



写真5 薬師寺の薬王水

岩の間から湧き水が流れ出ていた。まさに、むかし薬を調合する時に使うV字形の薬研に似た場所であった。現在でもここを薬研水と呼んでいることを地元の方に教わった。

薬王水は、資料に「薬師堂の奥の院嗽より出る嗽水なり」とある。二色根の薬師寺に行くと、薬師堂に登る石段の右側に覆屋をもつ湧水があり、今も水が出ていた。湧水の上に「薬王水」と大きく墨で書かれた木の額がある。

6) その他の清水

白竜湖のすぐ西側にある赤湯北町地区にも、「駄子(団子)水」(写真6)、「矢立の水」、「八幡前(仮称)」、「中吐水」、「橋ハキ清水」などと呼ばれる清水がある。「矢立の水」は旧八幡神社の北側、「駄子(団子)水」は北町植木哲夫氏宅の西側、「橋ハキ清水」(写真7)は高橋勇岐夫宅の西側にある。これらは赤湯七水と混同されているが、「弘法水(独鈷水)」を除けば別な清水であり、北町七水とでも呼ぶべきものである。



写真6 駄子(団子)水



写真7 橋ハキ清水

4. 白竜湖と湧水

これまで述べた赤湯七水と北町七水を地図に落とすと、第32図のようになる。『米沢地跡考』に書かれている赤湯七水の順序は、北町槻木の独鈷水に始まり二色根の薬王水までほぼ北東から南西の順となっていることがわかる。

白竜湖は、流入する河川よりはむしろ優勢な湖底の湧水に支えられ、絶妙な平衡のもとで泥炭地に浮いている湖沼とされる^(注2)。赤湯七水と北町七水は、白竜湖の西側山麓の湧水が所々に清水を形成していることを示しており、白竜湖にもこれらの湧水が及んでいることの証拠でもある。南陽バイパスによって遮断されているこれらの湧水をどう確保していくかが今後の課題となる。

(注1) 佐藤庄一 2014 『「赤湯七水」を探して』 芸文なんよう第15号

(注2) 佐藤五郎 1997 『白竜湖の水質と湖泥』 白竜湖・山形県指定天然記念物の動植物生息調査報告書



第 32 図 赤湯七水と北町七水の分布

5. 大谷地の米作りと農具

1) 大谷地の農作業と谷地舟

大谷地での農作業は、冬の堆肥運び、春の代かきから田植えに始まり、夏の除草や水管理、秋の稲刈り・稲の乾燥・脱穀と続いていく。

当時の大谷地の農作業は困難を極め、谷地舟が欠かせないものであった。とくに長さ 18 尺の谷地舟（親舟）は、堆肥や稲などの運搬に重要な役割を果たしていた。長さが 6 尺強の小舟とよばれる小型の稲舟もあり、刈取をした稲などを乗せて親舟まで運ぶのに用いられている。小舟は底板が平らな幅 21cm の 3 枚の杉板で組み合わせられ、側板が 2 枚、へさが 1 枚、後板 1 枚で全形ができる。親舟となる谷地舟は鉄類を一切使用せず木釘を用いるが、小舟は写真 8 のように接続に鉄釘を使用しているものもある。

また白竜湖周辺では、揚水路から水田に水を引き揚げる



写真 8 小舟

ために、「踏み車」とよぶ水車状の揚水機や「ふいご」とよぶ原始的な揚水機が用いられた^(注1)。

2) 大谷地の農具

次に昭和時代に使われた田下駄や三本鍬、唐箕^{とうみ}などの農具について述べる。当時の農具については、高畠町郷土資料館が、平成8年10月から11月に『大谷地を拓く』という企画展を開催し、その図録の中で高畠町郷土資料館に展示されている資料の一部を山崎正館長が「農具のいろいろ」として紹介している^(注2)。所有者が明示されていない資料もあるが、多くが白竜湖周辺のものと思われる。

田起しの平鍬や三本鍬（備中鍬）、荒越こしの馬鍬、馬耕のあと土を更に細かく砕く碎土機、苗代床に粃を定着させるころばし、田面を平らにする泥踏みや田ならしなど懐かしい農具が紹介されている。

このほか同館資料には、大谷地を開田するための大鎌や堆肥や稲を背負って運ぶたがら、田植えなどに使う田下駄（板かんじき・写真9と綱かんじき）、稲を刈るかま、千歯こきや足踏みの脱穀機、玄米と粃殻を選別する唐箕、精米用の石臼であるどずるす（土臼・写真10）、背中に背負うみのややせうまなども載っている。

白竜湖を中心とするこれらの農具は、先人の大谷地の開発を示す貴重な資料であり、所在をきちんと確認し、近い将来資料館に展示したいものである。



写真9 田下駄（板かんじき）



写真10 どずるす（土臼）

（注1） 錦三郎・錦厚 1991『写真集 白竜湖・大谷地』

（注2） 山崎 正 1996『谷地田と大鎌』高畠町郷土資料館「企画展・大谷地を拓く」